

『父が為 負いし地獄』より第一話

著者：金目

目次

登場人物紹介

第一話

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第二話：自白剤投与によるエロ尋問

第三話：虎雄と源二シックスナイン強要

第四話：虎雄と源二への金玉責め

第五話：虎雄の全裸撮影、オナニー強要

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

登場人物

荒城 虎雄（あらかし とらお）

男。34歳。無職。

体育大学卒業後、剣術修行のために海外を放浪していた。

平常時 10.6センチ、勃起時 25.5センチの童貞チンポ。

荒城 源二（あらかし げんじ）

男。56歳。剣術道場師範。

平常時 7.3センチ、勃起時 17.6センチのチンポ。

火浦 相馬（ひうら そうま）

男。44歳。ハウスキーパー。

源二に雇われ、身の回りの世話をしている。

毒島 徳郎（ぶすじま とくろう）

男。38歳。実業家にして源二の門下生。

荒城親子を辱める首謀者。

糸井

神木

沼沢

源二の門下生たち。

毒島徳郎に従い、荒城親子を辱める。

第一話

病院の廊下を野性味あふれる風貌の男が歩いている。

無精髭ですら不潔さではなく、男らしさを演出するものとなっている男前だ。

その動きには無駄がなく、生命としての力強ささえ感じさせる。

すれ違う看護師や患者たちは、男に目を奪われ、雄の可能性というものに感じ入る。

男の名は荒城虎雄。

虎の名の通りに、しなやかで野性味に溢れた物腰を惜しげもなく晒している益荒男だ。

虎雄がある病室の前で立ち止まった。

虎雄は呼吸を整えた。

この病室に滞在しているのは虎雄にとって敬愛する師であり、人生の指針であり、男の中の男と仰ぎ見る偉大な存在であったからだ。

改めて虎雄はドアをノックし、名乗った。

「父上、虎雄です」

虎雄は一礼をしてから病室に入った。

病室の中には白髪で渋み走った男前がベッドに横たわり、その横では温和そうな眼鏡の男性がリンゴの皮を剥いていた。

「なぜ、ここにいるのだ、虎雄よ」

白髪の男性がベッドから上半身を起こし、虎雄を睨みつけた。

白髪の男性の名は荒城源二。

その男前の風貌からも分かる通り、虎雄の父親であり、唯一の肉親だ。

「父上が倒れたと聞いて――」

「馬鹿者が」

虎雄の言葉は源二に遮られた。

「貴様は、男を磨き、剣の腕を高めるために修行に出ていたはずだ。

道を見出すまでは戻らぬ。

そう告げて家を出た貴様が、何をしているのだ」

源二の言葉は十二年前、家を出る際にかけてられた言葉と同じく厳しいものであった。

けれど、十二年の歳月は源二という男を衰えさせていた。

声の迫力が薄くなっていたのだ。

虎雄はそのことを寂しく思った。

「源二さん、虎雄さんを責めないでください」

温和そうな眼鏡の男性が源二に取りなそうとする。

「私が虎雄さんにお知らせしたのです」

「火浦さん、僕は虎雄には伝えるなどあれほど頼んだではないか」

源二が渋い顔をする。

「そういうわけにはいきませんよ、源二さん。

ご家族に伝えてくださいと医師に言われればそうしないわけにはいきません。

虎雄さんは源二さんの唯一の肉親ですよ」

火浦の言葉に源二が渋い顔をした。

源二は道理を重んじる人柄だ。

だから、火浦の言葉にこそ理があると悟っており、反論できないのだ。

「ああ、直接会うのは初めてですね」

火浦が立ち上がり、虎雄に頭を下げた。

「改めて挨拶を。」

私は火浦相馬、源二さんの身の回りのお世話をしています」

「荒城虎雄です。」

父がお世話になっています」

虎雄は火浦に頭を下げた。

「火浦さん、僕は虎雄と話がある。」

少し、席を外してくれるか」

「分かりました」

火浦が源二に頭を下げてから立ち上がり、虎雄に会釈をしてから病室から出て行った。

虎雄も火浦に会釈をした。

そして、虎雄は源二のベッドのそばにある椅子に座った。

「……」

源二が虎雄をじっと見つめている。

虎雄も源二の鋭い視線を正面から受け止める。

風もない室内だというのに、二人の気迫に気圧されたのか、花瓶に生けられた桜の花がはらはらと散り始める。

しばらくして、源二が口を開いた。

「道は見いだせたのか」

源二の問いかけに虎雄は言葉に詰まった。

道を見出すと源二に告げてから十二年、虎雄は己の道だと確信できるものを見いだせず
にいた。

人に交わり、山に籠もり、星夜の下で瞑想をし。

十二年の歳月を重ねても虎雄には己の道が見いだせなかったのだ。

「ならば、修行に戻れ。」

僕を理由に怠けるでない」

「ですが父上、その容体では道場の方も——」

「道も見出せぬ半人前が差し出がましいことを言うでない！」

源二が一瞬、往年の気配を取り戻したかのような一喝を放った。

その気迫を前に、虎雄は何も言い返せなかった。

「人に道を示す者は、まずは己の道を知らねばならぬ。」

道場の心配をするより前に、己の道を見出すのだ」

源二が目を閉じた。

「次にまみえるときは、道を見出すのだ。」

分かったな、虎雄よ」

「……かしこまりました、父上」

源二の頑なな態度を前に虎雄は何も言えなかった。

源二の指摘通り、己の道も見いだせていない虎雄が源二に代わって道場を支えようというのがそもそも差し出がましかったのだ。

虎雄は源二に深々と頭を下げた。

「失礼いたします、父上」

「さらばだ、虎雄よ」

虎雄は未熟な己への悔恨の念を抱きながら病室から辞去した。

「虎雄さん、話は終わったのですか？」

病棟の談話ロビーに差し掛かったところで虎雄は火浦に声をかけられた。

「ええ、終わりました」

虎雄は火浦に頭を下げた。

「差し出がましいようですが、源二さんは道場のことを何か言っていましたか？」

火浦の問いかけに虎雄は言葉に詰まった。

道場のことを父に申し出て、未熟を理由に拒絶されたことを火浦に伝えるのが恥ずかしかったのだ。

「……その様子では、源二さんは道場を引き継がせるつもりはなさそうですね」

「……はい」

火浦の言葉に虎雄は頷いた。

「時間があるのなら、少し話をしませんか？」

「大丈夫ですよ」

虎雄は頷き、火浦の向かいに席に座った。

「あとで医師から説明があると思いますが、源二さんの容体は思わしくありません」

火浦の言葉に虎雄はやはりと思った。

かつての覇気を失った源二の姿を加齢だけが原因だとは思えなかったのだ。

「激しい運動を続ければ、命にもかかわると言われています。

私が源二さんの意向に反して虎雄さんに事実を伝えたのもそうした理由からです」

「父上の容体はそんなに悪いのですか？」

驚いて問い直した虎雄に火浦は無言でうなづく。

「残念ながら、剣術道場の師範を務めることは難しいと医師に宣告されています。

虎雄さんは源二さんの唯一のご家族ですし、今後について話し合っしてほしいと私は願っています」

火浦の言葉に虎雄は何も言えなかった。

虎雄の母が前触れもなしに離婚をして家を出てから二十年、虎雄は源二の息子として、源二のただ一人の肉親として生きてきた。

病に倒れた源二を支えられる肉親は虎雄しかいないのだ。

だが、虎雄は源二に拒絶された。

源二を理由に修行を止めるな、と厳命されてしまったのだ。

虎雄は膝の上で拳を握った。

悔しかったのだ。

修行に出てからの十二年間を無為に費やし、己の道を見出すことができなかつた己の暗愚ぶりが。

道を見出して戻っていたのならば、源二も虎雄を拒絶することはなかつただろう。

虎雄は己の未熟さゆえに父である源二を支えられない己の無力さに打ちひしがれた。

「虎雄さん」

火浦に呼び掛けられ、虎雄は憂鬱な思考から現実に戻った。

「毒島さんに会ってくれませんか？」

「徳郎先輩にですか？」

毒島徳郎。

源二の剣術道場の門下生であり、虎雄の四歳年上の先輩だ。

海外を放浪していた虎雄には連絡手段がないため、近況は知らないが、話の流れで火浦が名前を出すということは、今も源二の門下生なのだろう。

「ああそうか、毒島さんをご存じなのですね。

毒島さんは今、門下生の取りまとめ役をされています」

火浦の言葉に虎雄は驚いた。

虎雄の記憶が確かなら、源二の門下生には毒島よりも年上の者も多くいたはずだ。

そうした面々を押さえて取りまとめ役になっているとはさすがに想像していなかつたのだ。

「毒島さんと相談をして、源二さんや剣術道場の今後について源二さんともう一度会話をする機会を作ってほしいのです」

火浦の言葉には源二や虎雄への配慮が溢れており、虎雄はその厚意に応えなければと決意をする。

「分かりました。

徳郎先輩と話し合ってみます」

虎雄は力強く頷いた。

虎雄はぼんやりと目を覚ました。

確か、火浦の助言通りに徳郎に約束を取り付けたうで会い、徳郎の屋敷で軽食を摘みながら近況を報告していたはずだ。

それなのに、どうしてこんなにも頭がぼんやりとしているのか。

頬を叩いて気合を入れようと思った虎雄は腕が上がらないことに気が付いた。

ぼんやりとした頭で己の身体を確認すると、両方の手足が椅子に拘束されていた。

「徳郎先輩、これはどういうことですか……」

虎雄が問かけると、徳郎が銀縁眼鏡をくいと人差し指で押し上げた。

「ん？ 覚えていないのか？」

虎雄を拘束しているとは思えないほど、徳郎の言動は自然なものであった。

「解いてください、徳郎先輩」

虎雄の言葉に徳郎がにやりと笑った。

「ああ、近況報告が終わったら解いてやるよ。

必要だろう？ 近況報告は。

なにせ、お前は今の源二殿がどんな指導をしているのか知らないからな。

その拘束はまあ、必要な処置だ」

「何を言っているのですか！」

虎雄は声を荒げた。

「おお怖い。

お前が暴れると困るから拘束しているんだよ」

「近況報告で俺は暴れたりしません！」

徳郎の言葉に虎雄は苛立った。

徳郎の言葉では虎雄はまるで思慮の足りない厄介者のようではないか。

父である源二に比べたら未熟とはいえ、虎雄は理を尊び、道を追求する一人の武士なのだ。

それをこのような扱いをされて自尊心が傷つかないはずがない。

「いいや、暴れるね。

これから見せるものは虎雄、お前にとって受け入れがたい現実だからな」

徳郎がリモコンのスイッチを入れた。

部屋が暗くなり、天井からスクリーンが下りてくる。

スクリーンに光が投影される。

徳郎は何かを見せようとしている。

だが、その何かは虎雄には分からない。

もやもやとした不安を抱えながら、虎雄はスクリーンに再生される映像を見た。

……見てしまった。

「では、今日の稽古をよろしくお願いします」

徳郎が礼儀正しく源二に頭を下げた。

源二が羞恥に顔を赤らめている。

そのことがまず、虎雄には信じられなかった。

虎雄にとって、源二は男の中の男であり、尊敬する師であり、人生の指針そのものだ。

そのような偉大な父が羞恥に顔を赤らめている理由が虎雄には思いつかなかったのだ。

「撮影は必要なのか」

「必要かどうかは私が決めます」

源二の言葉に徳郎は言い方こそ丁寧ではあったが、源二への敬意など欠片もない態度を見せる。

源二は怒るだろう。

虎雄はそう思ったし、そう信じていた。

だが、源二は怒らなかった。

門下生である徳郎の不遜な態度を叱ることもせず、無言で頷いたのだ。

そして、源二が剣道着を脱ぎ始めた。

老いによって肉が削がれ始めているが、無駄をそぎ落として凄みを増している肉体が露

わになる。

白禪一枚になった源二は羞恥に顔を赤らめていても男の中の男の風情を漂わせていた。

風雪に耐える松の古木のような風格と常人よりも大きな白禪のもっこり。

男とはかくあるべきという一つの指針と言っても過言ではないだろう。

そんな源二が白禪に手をかけた。

虎雄は訳が分からなかった。

なぜ、源二がカメラの前で全裸になろうとしているのか。

なぜ、徳郎などに良いようにされているのか。

驚きと混乱で虎雄は頭の中が滅茶苦茶になる。

源二が白禪を脱ぎ捨てた。

黒々とした茂みの下にずる剥けのチンポがぶら下がっている。

加齢によってメラニン色素が減衰した亀頭は、虎雄の記憶と違いピンク色になっていた。

尊敬する父である源二の急所であり秘所であるチンポを見てしまった虎雄は後ろめたさから目を逸らした。

忌まわしいことが行われようとしている。

虎雄はそう感じた。

何が行われるのかは想像もつかない。

けれど、源二の尊厳を踏みにじることが行われようとしていることは想像がついた。

「止めろ！ 止めてくれ！

止めさせてくれ！ 徳郎さん！」

虎雄は拘束されている椅子をぎしぎしと揺らしながら叫んだ。

「おいおい、早漏だな。

まだ前戯にも入っていないのに動揺をしてどうするんだ？」

徳郎がにやにやと笑っている。

「お前が尊敬する源二殿の本当の姿を教えてやるんだ。

感謝してほしいぐらいだぜ」

虎雄はスクリーンから顔を背けた。

だが、虎雄の背後に回った徳郎が強引にスクリーンに首を戻す。

「見ろよ、虎雄。

きちんと見ない限り、お前はずっとこの椅子の住民だ」

徳郎が悪逆に満ちた宣告をした。

「では、いつも通りに剣の手入れをお願いします」

徳郎の言葉に源二が頷いた。

そして、徳郎のズボンを脱がし、ボクサーパンツの上から膨らみを撫で始めた。

羞恥に顔を赤らめながら、源二は徳郎のボクサーパンツの膨らみを撫でまわしている。

その姿に虎雄は目を疑った。

虎雄にとって源二は、男の中の男であり、尊敬する師であり、人生の指針そのものだ。

そのような偉大な男が、他の男の、それも門下生である徳郎の下腹部なんかに触れていることが信じられなかったのだ。

源二の奉仕によって徳郎のボクサーパンツの膨らみが形を変える。

勃起しているのだ……

いや、源二が徳郎のチンポを勃起させているのだ。

性交とは男と女の間にあるもの。

性に疎い虎雄はそう妄信していた。

学生時代にふざけて友人のチンポに触ったり、オナニーのネタを話し合ったりすることもなかった聖物の虎雄にとって、徳郎のチンポを勃起させる源二の姿は劇薬そのものであった。

まず、男が男に奉仕していること。

これ自体が信じられなかった。

そして、それを行っているのが尊敬する父、源二であることも受け入れがたかった。

源二は虎雄にとって、男の中の男、尊敬する師、そして人生の指針だ。

そんな存在が男に奉仕をしている。

こんなおぞましい事実をどう受け入れればよいというのか。

「父上に何をした！」

虎雄は背後に立っている徳郎を怒鳴りつけた。

「おかしいことを言う」

徳郎が声をあげて笑った。

「何がおかしい！」

「この映像を見てみる。

俺は脅迫したり強要したりはしていないだろ。

そもそもだ」

徳郎が虎雄の耳元に口を近づけた。

「偉大なる師である源二殿が、誰かに強要されて何かををすると思うのか？」

徳郎の言葉に虎雄は言葉に詰まった。

徳郎の言うとおりのだ。

源二は偉大なる男だ。

そんな男をどんな畏に嵌めればこんな無様でおぞましい真似を強要できるというのか。

だがしかし、徳郎の言葉が正しければ、源二は自ら望んであんなおぞましい真似をしていることになる。

源二への崇拜じみた想念により、虎雄の世界は真っ二つに割れてしまう。

源二が偉大であるがゆえに強要されずにあんな真似をしているという解釈。

源二は偉大な男であるがゆえに、強要されてあんな真似をしているという解釈。

どちらの解釈も虎雄の中の源二とスクリーンの中の源二を結びつけることができない。

虎雄は混乱し、何も言えなくなった。

源二が徳郎のボクサーパンツを下げた。

ぶるんと徳郎の勃起チンポが飛び出す。

チンポ比べなどしたことがない虎雄には徳郎のチンポがどの程度の雄なのかを判別することができない。

分かることは、虎雄の勃起チンポに比べれば小さいということだけだ。

徳郎の勃起チンポを源二が掴んだ。

そして、黒ずんだ亀頭を舌で舐め始めたのだ。

「ひっ」

排泄器官であるチンポを口に含む源二の姿のおぞましさに虎雄は悲鳴を漏らした。

悪夢としか思えなかった。

悪夢であってほしかった。

けれど、手足に食い込む枷の重みが虎雄にこの画像は現実のものであると知らしめる。

源二は徳郎の勃起チンポの亀頭を舐めながら陰茎を抜く。

フェラチオという言葉を知らない無垢な虎雄にとって、源二の行為は冒瀆でしかなかった。

男という生き物への冒瀆。

源二という偉大なる男への冒瀆。

だが、冒瀆はこれに留まらなかった。

源二の股間でチンポが勃起し始めたのだ。

触れられてもいないのに源二のチンポがむくむくと勃起し始めたのだ。

それは、性に疎い童貞の虎雄にもある一つの事実を突きつける。

源二は徳郎のチンポの味に興奮しているのだ。

虎雄の目から涙が零れた。

あまりにもおぞましく、ありえざる冒瀆行為の数々を見せつけられて虎雄の感情が決壊したのだ。

源二が徳郎のチンポへのフェラチオを続ける。

徳郎の喘ぎ声がわずかに聞こえてくる。

「いつも通りにしてくださいよ」

徳郎のその言葉とともに源二の口からザーメンが零れた。

徳郎は尊敬する男であり師である源二の口の中に射精をしたのだ。

なんという悪逆。なんという非道か。

虎雄は怒りとおぞましさに胸が張り裂けそうになった。

源二が徳郎のザーメンを啜っている。

虎雄にとってザーメンとは妊娠のために必要なものでしかない。

そんなものを源二が飲み干そうとしていることが信じられなかったのだ。

虎雄にとって源二は偉大な男だ。

その偉大な男が性処理に扱われている。

そんなおぞましい事実をどう受け入れればよいというのか。

虎雄にはどうしても受け入れられなかった。

源二は偉大なる男だ。

虎雄にとって男の頂点に君臨しているのが源二なのだ。

その源二の価値が貶められることは、虎雄の存在価値を否定するものでもあるのだ。

止めてほしかった。

源二にこのような真似をしてほしくなどなかった。

けれど、虎雄は何も言えない。

映像の源二に何を言っても無駄だからではない。

怒りと絶望とおぞましさと。

感情が膨れ上がって虎雄を圧迫しているからだ。

「源二殿、いつものように俺の剣を導いてくれますね」

射精を終えてもなお、ギンギンにチンポを勃起させた徳郎の言葉に源二が赤らめた顔で小さく頷いた。

ドクン……

虎雄はその姿に戸惑った。

虎雄にとって源二は男の中の男だ。

一般的に見ても源二は立派な男だ。

それは、源二の凄みを帯びた肉体や下腹部で勃起している立派なチンポも示している事実だ。

だというのに、虎雄は源二を色っぽいと感じたのだ。

性欲の対象として誤認してしまったのだ。

誤認。そう、誤認だ。

源二は男の中の男だ。

そんな源二相手にどうして虎雄はメスの臭いを嗅ぎ取ってしまうのか。

異様な状況に毒されたとしてもあり得ざる不敬だ。

許されざる悪逆だ。

虎雄は後ろめたさを感じながらもスクリーンの中の源二から目を逸らすことができなくなっていた。

源二が徳郎に背中を向けた。

そして、やや前かがみになり尻を突き出す姿勢をとる。

源二の尻は若い頃に比べて肉が削がれているが、それでもなお男らしい屈強な尻をしている。

源二がその尻肉を己の手で割り開いた。

源二のアナルは加齢によって色素が減衰し、きれいなピンク色をしている。

「さあ、お前の剣を導こう」

源二の言葉に合わせて、源二のアナルがひくひくと収縮する。

その姿は男でありながらメスの臭いを漂わせる境界性の蠢感を纏っていた。

男にしてメスという矛盾した有様が源二の男らしさとメスらしさを際立たせ、香り立つ

エロスを体現しているのだ。

そのエロスを前に、虎雄もまた一匹の雄でしかなかった。

源二のはしたない姿を見ているという後ろめたさは背徳感となり性的高揚を煽る炎となった。

依然、源二は虎雄にとって男の中の男である。

偉大なる男のはしたない姿を見ることには罪悪感が伴う。

けれど、その罪悪感も女神の沐浴を覗き見る不埒者が感じるような、罪であるが故の愉悦を伴っていた。

虎雄は下腹部が窮屈になった。

常人よりも立派なチンポが勃起し始めたのだ。

虎雄は己の変化に戸惑いつつも、メスの臭いを漂わせる源二から目を逸らせない。

戻れなくなる予感がしたが、源二のメスの前に虎雄の雄が釘付けになっているのだ。

源二の尻を徳郎が掴む。

源二がメスであることを嗅ぎ取った虎雄ではあるが、この先の展開を予想できない。

源二にはマ○コはない。

どうやって徳郎のチンポに奉仕するのだろうか……

徳郎が勃起チンポを源二のアナルに押し当てた。

まさか、と虎雄は思った。

確かにそこは穴だ。

穴ならばチンポを挿入できるだろう。

けれど、その穴は排泄器官だ。

そんな場所で男を受け入れられるのだろうか……

虎雄の中には源二が男であるという認識が欠け始める。

源二が徳郎に奉仕し、メスとして徳郎の雄を導こうとしていることへの嫌悪感がなくなりつつあるのだ。

虎雄は悪いことだと思いつつも源二の淫姿から目を逸らせない。

流していた涙は乾き、雄の欲望にぎらついた目でスクリーンを見つめている。

源二のアナルが徳郎の勃起チンポを受け入れ始めた。

あんなに小さく窄まっているというのに、受け入れられることが当然のように抵抗もなく徳郎のチンポが源二のアナルに侵入する。

「おお……」

源二が快楽に感極まった表情を見せた。

目は潤み、口はだらしなく開かれ、メスとして雄を受け入れる悦びに満ちた表情を浮かべている。

虎雄はそんな源二の姿にチンポが痛い程に勃起している。

虎雄のズボンは大きく盛り上がり、頂点に我慢汁の染みが浮き出ている。

「ああ、徳郎の雄を導こう。

快楽の園の深奥へ！」

源二が恍惚とした表情で淫らな言葉を口にする。

徳郎が源二の尻肉に下腹部をぶつけ始めた。

「おっ！ おっ！ おっ！ おおっ！ おほっ！」

源二が全身を揺さぶられながら浅ましい喘ぎ声を出し始める。

源二の凄みを帯びた肉体に汗が浮かび、淫靡な艶を醸し出す。

源二の下腹部では立派なチンポがギンギンに勃起し、鈴口から我慢汁を流している。

凄みを帯びた肉体も、立派な勃起チンポも男らしさの象徴であるというのに、今の源二はメスでしかなかった。

男を誘惑し、男を狂わせ、男を食うメスの性。

それが今の源二であった。

源二のメスの性に狂ったかのように徳郎が源二を荒々しく犯す。

虎雄もスクリーンの中の二人の淫らな在り様に触発されたかのように腰を動かし始める。

虎雄のズボンのもっこりに広がる我慢汁の染みが大きくなっていく。

「欲しいか！ 俺の子種で孕みたいか！」

徳郎が源二を荒々しく犯しながら問いかける。

「孕みたい！」

源二が浅ましい声を上げた。

「この浅ましいメスに！」

褒美を！ ご褒美をお！」

源二の言葉に徳郎がにやりと笑った。

「そら、くれてやるぞ！」

徳郎がひときわ強く源二の尻に下腹部をぶつけた。

そして、ぶるりと全身を震わせる。

性に疎い虎雄ではあるが、同じ男として分かった。

徳郎は源二の尻の中に射精をしたのだ。

虎雄にとって最も尊い存在である源二をそのチンポで完膚なきまでにメスとして遇したのだ。

「おおお！」

徳郎さまの子種が！」

源二もまた全身を震わせた。

ドピュドピュと立派なチンポから子種を無駄打ちしている。

源二もまた、メスとしてチンポに屈服した証拠であった。

「うくっ……」

虎雄もまた全身を震わせた。

ギンギンに張った股間のもっこりが大きく揺れ、染みが広がる。

徳郎と源二のセックス映像に中てられて射精してしまったのだ。

じんわりとザーメンの生温かさが虎雄のパンツに広がる。

射精をしてしまった虎雄に冷静さが戻った。

その冷静さが虎雄にむごい現実を突きつける。

虎雄は、男の中の男であり、尊敬する師であり、人生の指針である源二にメスを見出

し、性的欲望の対象としてしまったのだ。

なんという冒涇！

なんという悪逆か！

虎雄は己が犯した罪の重さに歯をがちがちと震わせ始めた。

虎雄は男であるにもかかわらず、男に欲情してしまった。

その相手がよりにもよって、男の中の男である源二だ。

こんな罪をどう償えばよいのか……

虎雄は全身を震わせる。

「よく分かっただろう？

こんな風に源二殿には俺たち門下生の剣を導いてもらっているのさ」

徳郎が楽しそうに笑った。

「ふざけるな！

こんな！　こんなおぞましい行為が指導のはずがあるか！」

源二の淫姿で勃起し、射精までしてしまった後ろめたさを押し付けるかのように、虎雄は徳郎を怒鳴りつけた。

その気迫は練達の武術家にふさわしいものであり、気迫に負けて部屋の家具がガタガタと揺れる。

けれど、徳郎はその気迫をそよ風のように笑って受けている。

「指導さ。

俺たち門下生が、雄の剣を正しく使えるように源二殿自らが指導されている。

それだけのことじゃないか」

徳郎の言葉に虎雄は歯ぎしりをした。

その憤怒の表情は、鬼そのものとも言えた。

もしも、この様子を第三者が見ていたのならば、椅子から解き放った途端に虎雄は徳郎を殴り殺すだろうと予想しただろう。

だというのに、徳郎の表情には命の危機への恐れなどなかった。

「お前だって、源二殿の指導を求めているだろう？」

「侮辱するな！」

徳郎の言葉を虎雄は拒絶した。

けれど、徳郎は気にした様子もなく虎雄の前に立つ。

そして、ナイフを取り出し、虎雄のズボンを切り裂き始めた。

「止めろ！　止めろ！」

秘密を暴かれることを恐れて、虎雄は必死に徳郎を制止する。

「おいおい、こんなにプンプン臭わせて隠し通せると思っていたのか？」

徳郎が鼻歌を歌いながら虎雄のズボンを切り裂いた。

ぶるん！

ズボンに押しえ込まれていた虎雄の童貞チンポがザーメンを飛ばしながら勢いよく奮い立った。

虎雄はあまりの恥辱に言葉も出ない。

「虎雄、お前だって源二殿の指導を求めているんだろ？」

でなけりゃ、こんなにザーメンをぶっ放すはず、ないもんな？」

「言うな！」

実の父親にして男の中の男である源二に欲情し、射精をした事実を嘲笑われ、虎雄は屈辱に震えた。

可能ならば、徳郎の喉笛を噛み切った上で、腹を斬って自害してしまいたい。

けれど、その願望は椅子に拘束されている虎雄には叶えられるはずのないものであった。

「虎雄、見ろよ」

徳郎がスクリーンを指さした。

虎雄はスクリーンを見て絶句した。

スクリーンには虎雄のズボンのもっこりが映されており、もっこの染みがザーメンによって広がっていく様子までもが表されていたのだ。

「源二殿がこれを見たらどう思うだろうなあ」

徳郎が楽しそうに笑っている。

「ふがない虎雄の剣を指導しなければならぬ、と思うだろうな」

徳郎の言葉に虎雄はぞっとした。

徳郎は、虎雄が実の父親に欲情し、射精したことを暴露すると暗に示しているのだ。

実の父親であり、男の中の男であり、尊敬する師であり、人生の指針そのものである源二にこんな無様な姿を知られてしまったら、虎雄は源二に失望されるだろう。

それだけは……それだけは耐えられない。

「それだけは止める！」

「止めてください、だろ？」

徳郎が絶対的強者の余裕をもって虎雄を言葉で蹴る。

虎雄は徳郎に逆らえないことを自覚した。

実の父である源二に欲情し、射精をしてしまった事実がある限り、虎雄は徳郎に勝てないのだ。

「……止めてください、お願いします」

虎雄は徳郎に頭を下げた。

悔しさと恥ずかしさで虎雄の目から涙が零れる。

「そうだなあ、俺の頼みを一つ聞いてくれるのなら、お前の頼みも一つ聞いてやるよ」

「……なんですか？」

虎雄は、徳郎の言葉に嫌な予感を抱いた。

けれど、虎雄は逆らえなかった。

逆らうことなどできなかったのだ。

「知っての通り、源二殿の容体は思わしくない。

これまで通りの指導を続けるのは無理がある。

だが、源二殿の指導を求める門下生は大勢いてな。

彼らの剣を放置するわけにもいかないだろう？

だから」

徳郎が虎雄の鼻先に指を突きつけた。

「虎雄には源二殿に代わって俺たちの剣の指導をしてもらう」

徳郎の言葉に、虎雄は怒りと屈辱で頭が真っ白になった。

徳郎の言う指導とは、虎雄の目から見れば男を愚弄するものであり、男にとって最悪の行為でしかない。

男が男に奉仕し、射精させる。

男が男を受け入れ、射精させられる。

あんな汚らわしい行為を虎雄に受け入れろ、というのか。

「なかなか優しい提案だろ？」

虎雄、お前だって父親である源二殿に無理はさせたくないだろ？

源二殿の負担を肩代わりすると思えば、安いもんじゃないか？」

徳郎の言葉には源二と虎雄への嘲笑が満ちていた。

だが、虎雄は徳郎の言葉を冷静に吟味した。

尊敬する父である源二に、おぞましい行為をさせている男は徳郎一人ではない。

徳郎の口ぶりでは何人、いや、十何人もの男が源二を辱めているのだ。

そして、病人である源二にあのような屈辱を与え続ければ、ストレスで病状が悪化することは目に見えることだ。

ならば、虎雄が源二のためにできることは源二の代わりに務めることで源二を守ることではないか。

虎雄は、己もまた源二を辱めた男と変わりのない存在であるという事実から目を背け、源二のためと己の心を偽る。

源二のためならば、これは、仕方のないことなのだ。

「分かりました。

父上の代理、未熟ながら務めさせていただきます」

虎雄はこうして、己の尊厳を売り渡す言葉を口にした。

「Good!」

徳郎が憎たらしい程に流暢な発音で虎雄の決意を嘲笑った。

虎雄はそのことに怒りを覚えた。

その怒りを虎雄は源二への敬意の念で押さえ込んだ。

これは尊敬する父である源二のためなのだ、と念仏のように心の中で繰り返しながら、虎雄は必死で怒りと恥辱を押さえ込んだ。

奥付

『父が為 負いし地獄』より第一話

初出：2022年5月30日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep